

▶54年目のシーズンに向けても準備は怠りない



ビッグジュン・矢島純一の“我がボウリング人生”——後編

# 矢島 純一

やじま・じゅんいち / 1945年8月14日生まれ、東京都出身。1967年プロ入り（1期・ライセンスNo.18）。通算41勝、PBA1勝。公認パーフェクト28回。所属：中野サンブラザボウル、(株)LTB、ABS、(株)N&K

「60年ボウリングを続けてきてもまだこれでいいって思えるものがないんです」

2016年、70歳で挑んだPBA50ツアーのITRCスーパーシニアクラシックで念願のPBA初タイトルを獲得。またシーズン中に74歳を迎えた昨年はポイントランキング39位と、年齢に抗って輝きを放ち続けるその姿は、まさに生涯スポーツの体現者だ。

## 70歳でつかんだ PBAタイトル

1967年、JPBA創立記念大会での初タイトルから、ブームが去ってトーナメント数が激減するなかでも着実にタイトルを積み重ね、1999年の第23回ジャパンオープンまでの通算41勝は、もちろん男子では文句なしの1位だ。一方で、50歳を過ぎたころから少しずつ体力的な衰えを感じるようになっていた。

ちょこちょことトレーニングはやっていただけ、50代の前半ぐらいに、これはもう1回鍛え直さないといけないと思うようになった。それで2000年にトレーナーの先生のところに通い始めました。「何歳からでも筋力をつくけど、年を取れば取るほど、いい筋肉を作るのには時間がかかるよ」といわれた。たしかにしばらくは成果を感じられなかったけど、60歳に近くなって、3日間、4日間の試合でも腰も痛くないし、疲れ方が違うなって感じるようになった。今もその先生のところに通い続けているので、もう20年になります。

それを裏付けるように、60代になっても楽々とシードをキープしていた。2011年は自己ワーストの141位と苦しんだが、限界説を打ち消すように14年はランキング10位、シーズン中に70歳を迎えた15年は9位と健在ぶりを示した。そのご褒美ともいえるだろうか、翌16年6月に米・ラスベガスで行われたITRCスー

パーシニアクラシックで、初のPBAタイトルを手にした。

本当は、そのすぐあとに行われるUSBCマスターズと翌週のシニアUSオープンに参加する予定でしたが、「同じ会場で新しく始まった大会があるから出たらどうだ」といわれて、じゃあ練習がてら出てみようか、くらいの気持ちでした。



▲70歳で念願のPBAタイトル獲得。翌年も優勝決定戦に進んだが、同じロン・モアーにリベンジされ、連覇はならず

60歳以上が出場資格の同大会に、70歳10カ月で参戦。予選(16G)を3599の3位で決勝ステップラダーに進むと、3位決定戦ではPBA殿堂入りのレジェンド、ジョニー・ペトラグリアを245:239と下した。優勝決定戦は、トップシードのロン・モアーが終盤@ピンタップに苦しむ間に、逆にストライクをつなげて突き放し、248:218で退けた。

決勝のレーンはリメンテされて、それまで使っていたボー

ルではどうしても@ピンが飛ばない。それで予選で使わなかったボールに替えたら、先の動きがすごくよかった。優勝はもちろんうれしかったけど、いまひとつ現実感がなかったですね。

JPBA誕生の前年に、日本代表としてBPAA(全米経営者協会)の大会に派遣された。その大会では準決勝までいって賞金110ドルをもらったけど、それよりも、なんでこの速いレーンでこんなに曲がるんだろうというように、日本とは別次元のボウリングに衝撃を受けた。これは日本だけでやっていたのではレベルアップできない、アメリカに挑戦し続けようと、そのときに心に決めました。

## シーズン再開へできる準備を…

アマチュア時代も含めると、キャリアは約60年になるが、ボウリングへの情熱、向上心は、衰えを知らない。はた目には変わりなく見える投球スタイルも、モデルチェンジを繰り返してきた。

他の競技でも同じだと思うけど、これでいいってものがないんです。自分の思っているところまでいけていない、もうちょっと何かあるんじゃないかと思うんですね。近年もスライドの距離を短くしたり、ドリルのグリップを変更したり、ちょっとローダウンの練習もしてみたりと、いろいろやっています。

スライドは長いほうがリリースに余裕が持てるけど、短くして止まってリリースをした方がパワーが出るので、昔から比べたらかなり短くなりました。グ



▲(株)住建ハウジングの羽田会長との交流から誕生した“チャンピオンズカップ”。華々しく記者発表も行われたが、コロナ禍で中止となったまま

リップも、補助器具が禁止になったこともあって、以前は目いっぱい広いスパンで指の爪が見えるぐらい浅く入れていたのを、2分の1インチぐらいは狭くしました。

長いキャリアのなかで築いた人脈は幅広いが、その人脈なくしてKUWATA CUPの誕生も、またコロナウイルスの影響で実現は先延ばしになっているが、住建ハウジングプレゼンツ・チャンピオンズカップの話もなかったはずだ。

桑田(佳祐)くんが体調を壊したときに、健康のためにとボールとシューズをプレゼントしたら、昔熱中したボウリングへの情熱が再燃して、所属するアミューズの現社長の中西正樹さんに本社に呼ばれて「大会をやりたいので相談に乗ってほしい」といわれた。いろんな世代の人が参加できる大会にしたいということで、あの第1回目を実現した。その第1回の反省も踏まえて第2回をという直前に、残念ながらコロナで中止になってしまった。

住建ハウジングの羽田晴喜会長とも、亡くなった山中順之助(4期)の弟ということで、昔

からよく知っていました。ワンデートーナメントでは破格の優勝賞金500万円に加え、男女混合戦ということで注目を集めていたけど、これもコロナで中止になった。でも「次にやるときは、もっとスケールアップして…」という話もしていただいているので、楽しみです。

すでに永久シードの権利を持っていて、ランキングの順位を気にする必要はないが、昨シーズンもシード圏内の39位と、健在ぶりを発揮している。新型コロナウイルスで中断している54年目のシーズンに向けても、準備は怠りない。

自分のできることはすべてしっかりやって、いつでも準備オーケーという状態にしておきたい。いつ壊れて投げられなくなっても、それはそれでいい。ないって覚悟はあるけど、アマチュアの方、シニアの方からボクスタイルがお手本になるってしてもらえたら、できる限り現役で投げたいという思いもあります。そしてコロナが収束していれば、来年をファイナルチャレンジとしてもう一度アメリカに行きたいと思っています。